

王莖八幡宮の宝山台地は、標高一六〇メートル、周囲の水田との比高差約八〇メートルである。

東西五〇メートル、南北一三三メートルほどの長方形平地で、上の段、下の段の地名が残り、城台の西側に三段の腰曲輪が残っている。

以前は、台地の周囲に濠が残っていたが、現在は埋め立てられてしまっている。

城跡の西、六〇メートルほどの所に井尻川、東側には旧今川の古川低地があり、在城時代には、外堀の役割となっていた。

城跡は、東側の今川を東の防御線とし、北から下馬場、中馬場、上の馬場の地名が残っている。

貞和年間（南北朝時代、一三四五〜五〇年）馬ヶ岳城の出城として、宝山伊豆守が築城し、宝山城と称した。

豊後守護職大友氏は、嫡男氏鑑に家督をゆずらず、甥の親世を後継者とした。

これは、大内義弘の妹が親世の内室ということで、義弘が將軍義満に働きかけ、幕府の圧力に氏時が屈したためである。

氏鑑としては大いに不満である。

豊後、豊前の武将は氏鑑に同情し、協力を約束する。

当時、豊前の守護職は、大内義弘であった。

応永五年（一三九八）、氏鑑は豊前諸城主を味方に引き入れ、大友親世に反逆を企てる。その中に、障子ヶ岳城主足利駿河守、馬ヶ岳城主に新田上野介とともに、宝山伊豆守の名があ

る。『両豊記』

天文年間、新田氏の一族、安東市次郎重秀、安東万次郎などが城主であった。『豊前古城記』

永祿年間（一五五八〜七〇）安東右馬頭長好が城主であった。天正七年（一五七九）、菟島合戦で、宝山城主安東長好は、

馬ヶ岳城主長野三郎左衛門助盛と同心して、杉重吉の籠もる菟島城を攻略し、攻め落とした。『両豊記』

宝山城の廃城年代は不明である。

### 三 高来城 行橋市高来・入覚

高来城跡は、椿市小学校の西約二〇〇メートルの、高来天聖寺の南約二〇〇メートルの池部台地上にある。

高来集落の北西にある、峻嶒の塔ヶ峰から南東にのびた舌状台地（標高六〇メートル）に築かれた山城である。

城跡は、東西一二〇メートル、南北三〇メートルほどで、高来と入覚の境界に位置する。北側に二段の腰曲輪と切岸がよく残り、南側は急峻な断崖となる要害の地相である。

高来城に関する文献は少なく、応永五年（一三九八）、中国の雄大内盛見が、豊前に攻め込んだとき、高来城主足利尾張守忠氏が大内盛見に味方して従軍したという。『両豊記』

城跡の北にある大行事地区から、高来一带には、倉谷、別所、追殿、居屋敷などの地名があり、城跡や居館との関係を思

わせる。

#### 四 等覚寺城 とかくじじょう 京都郡荊田町大字山口字等覚寺

等覚寺城跡は、等覚寺松会で有名な白山多賀神社の社地一帯に位置する。

城跡は、旧白川小学校山口分校跡の台地から南にのびた尾根上にあり、城郭遺構と修験道遺構との重複のため、判別がつきにくい状況であるが、土塁がよく残っている。

北側の尾根筋には、五条の堀切で城内と城外が区画されている。最も特徴的なことは、八〇条をこす畝状堅濠群の存在である。

畝状堅濠群は、上下二段、一部三段に構築され、上下の畝状堅濠群は横堀で区切られている。

等覚寺城は、長野氏の戦略的重要拠点であり、長野三郎左衛門助盛（祐盛とも）が城主であった。

長野助盛は、永禄十一年（一五六八）六月二十八日、岩隈城（勝山町岩熊）に毛利方が立て籠もったため、入丹丹後入道、城井左馬助、安東三郎らと岩隈城を攻め落としている。

同年九月には、毛利の大軍に攻められ、等覚寺城は落城した。

「九月三日至貫越打廻候、また安藝衆あきしゆう去八月十六日ヨリ渡海仕候、又宮尾取、長野城三岡取悉候、同三日酉時セメ候、同四日二小三岡ハ落候、

同五日大三岡落、同夜等覚寺落居候、長野兵部左京ハ被打、其外城内男  
女数千人生害候、敵多損候風聞候、三河守ハ豊劔フシゴへ参候……」『宇佐到津  
文書』

永禄十一年（一五六八）九月三日貫越で戦が行われた。又毛利勢、去る八月十六日より海を渡り、また、長野城、宮尾城（稗畑山城…小倉南区山本）を攻め取り、三岡城（三ヶ岳城）をことごとく落城させた。

五日夜には、等覚寺城も落城、そのほか、城内の男女数千討たれ、敵方（毛利方）も多くの損害を出したと聞き、長野三河守（三郎左衛門助盛）は豊後へ逃れたとある。

これは、永禄十一年（一五六八）九月の毛利勢による「長野退治」の際のことを記載したものである。

「九月五日、大三岡落城、同夜等覚寺落ち居候、長野兵部左京は打たれ候」との記載から等覚寺城は、永禄十一年には存在し、その後廢城となったと思われる。